⑪-1

共働き家庭の父親のゲーム・情報検索頻度が育児のIT利用を介して子ども評価に及ぼす影響：日・米・スウェーデンの比較

○加藤邦子（川口短期大学こども学科）

問題と目的：共働き家庭で未就学児を育てる親は，日中保育施設を利用するために育児に関与する時間が短くなりがちであろう。IT社会においては，生活にITを適切に取り入れることにより，効率的に家事をこなしたり，育児体験が豊かになる可能性があり，親子関係を維持するためのツールとして有効と考えられる。

日本の20歳～49歳の父親のうち，希望する子ども数にまだ達していない人を対象とした調査結果によれば，「子どもをもっと増やしたいか」という質問に対し，「増やしたくない」の回答が５割近くを占め，米国，スウェーデンの15%未満と比べると消極的であった（内閣府，2012）。Elder（1998）はライフコース理論において，その人が経験する時代と場所，エージェントを介してライフコースが形成され，過去は将来や発達上の人生の移行，イベントに影響を与えるとしている。父親がITを自分のためにプライベートでどう利用しているかが，育児のIT利用に反映され，ひいては子どものIT利用や子ども評価に影響を与えると考えられる。本研究では，父親から子へのIT利用の影響を説明するための理論として，ライフコース理論が適用できる可能性を検討する。

これまで日本の父親のIT利用が夫婦間協力（コペアレンティング）に及ぼす影響を検討した研究（加藤，2013）では，IT利用が夫婦の会話時間の増加につながり，コミュニケーションが増える結果，コペアレンティングを高めることが明らかになっているが，未就学児への利用を捉えた研究は少ない。本研究の目的は，日本・米国・スウェーデンの共働き家庭の父親が，自らのIT利用を，親子遊び，育児情報検索に反映させて育児関与する結果，それが父親の子どもの捉え方にも影響するという仮説を立て，実証的に検討することである。その際，未就学児を育てている有業の父母を対象としたコミットメントの研究（加藤，2007）を参照し，親であることへの心理的愛着と維持への動機づけも育児関与に影響を与えると仮定してモデルに組み込むこととした。

方法：日・米・スウェーデンの未就学児をもつ共働き世帯の父親（日本563人，米国785人，スウェーデン829人）を対象とし，「父親の子ども評価」を従属変数とし，属性，IT利用頻度，IT親和性，夫婦会話時間，育児世話頻度，親役割へのコミットメント，子ども評価（PSI尺度）を独立変数，育児のIT利用頻度，子どものIT利用時間を媒介変数とする多母集団の同時分析を実施し比較した（AMOS ver.25）。

結果：

１．父親自身のゲーム利用頻度が高いほど，３国とも子どもとのゲーム利用が多い。子どもとのゲーム利用頻度は米国では父親の子ども評価を有意に高めているが，スウェーデンは有意傾向で，日本は有意な影響は見られなかった。父親自身の情報検索頻度が高ければ高いほど，米国，スウェーデンでは育児の情報収集が少なくなるが，日本は有意なパスは見られない。また育児情報収集頻度が高いほど３国共通に父親の子ども評価を低い結果だった。父親自身のIT親和性が高いほど，３国とも共通して子どもとのゲーム，育児情報収集頻度が高まっていた。

２．子どものIT利用時間が長いほど，３国とも「父親の子ども評価」は低められていた。

３．米国・スウェーデンの父親は世話頻度が高く，親役割へのコミットメントも日本の父親より高い値を示した。

考　察：未就学児を育てる共働き家庭の父親は，自らがゲームを楽しむというIT利用頻度が高いほど，子どもとITゲームをすることから，ITを使った親子遊びに関しては，ライフコース理論で説明することが可能であると考えられる。一方自身の情報検索（マップ，交通渋滞，天気，ニュース番組等）が多いほど，米・スウェーデンでは育児情報の収集頻度が少なっており，応用しにくい状況があることが示唆された。ネット上の育児情報について最近，父親が検索したいと思うような育児情報が乏しいという研究結果（Mniszak, et al.,2018）があり，従来のHP上の育児関連の情報は母親にとってはアクセスしやすかったり，利用価値が高いと考えられるが，父親の育児に肯定的な影響を及ぼすのかという検討も必要であると考えられる。，さらに育児情報の検索頻度が多くなると，父親による子ども評価を低めており，育児情報の内容が父親にとっては，混乱を招いたり，親子関係に生かしにくい傾向があることも示唆されよう。日本はITを利用して子どもと接するよりも，まず直接的な育児行動や世話する頻度，子どもにコミットする動機づけを高める必要がある。

謝辞：お茶の水女子大学石井クンツ昌子教授を代表とする科研費補助金基盤研究から個票の提供を受けた。記して感謝申し上げます。

（キーワード：ライフコース理論，IT利用，父親）